

マタイによる福音書 1:18~25

讚美歌一編 510 番をご一緒に歌い、使徒信条をもって信仰を告白し、これより御言葉に聞いていこうとしているわけですが、そこで、御言葉に聞いて行くに当たって、皆さんの心の中で大きな位置を占めているものは何でしょうか。今日は母の日と言うことで、藤沢教会では、讚美歌一編の 510 番を共に歌うのが慣例となっています。それゆえ、お母様を思い出している方も多くおられることでしょう。ただ、比較的年齢の低い方にとっては、お母様はご存命でしょうから偲ぶということはないのでしょうか。母を思うということは今のことであり、それゆえ、そこにはお母様を天にお送りした方とは、また違った思いがあるということでしょう。そして、私たちが今日集められている理由は、いずれにせよお母様を思っていることではありません。いつもと同じように御言葉に聞き、それぞれの信仰を確かめるためにいつもと変わらぬ礼拝を献げているわけです。しかし、今申し上げたことがその通りであるとすれば、私たちの気持ちは大きく二つに分かれていることとなります。そこで、母か、それとも神か、このそれぞれの視点に立って相手を見ていくなら、自分の向こう側にいる人たちは、少なくとも気持ちの上では自分とは異なる相手であることとなります。つまり、大げさな言い方をすれば、主を礼拝するために集められた私たちの目の前には、今、大きな溝があるということでしょう。

しかし、こうしたことは、今日に限ったことではありません。聖書の御言葉が私たちに求めることは信仰の一致であります。これについては、皆さんも恐らくは異論はないのでしょうか。主の愛によって集められている私たちがバラバラなままであっていいはずはないからです。

けれども、総論は賛成でも各論に至ってはどうかでしょう。そこで、その説明として言われることが、私たちは皆罪人であるということです。それゆえ、罪人である私たちが礼拝に集められるということは、そこにいろいろなものが持ち込まれるということです。つまり、人間としての問題性がそこで露わにされるということです。ですから、それがどう現れるかは、私たちもよくよく弁えておく必要があるのですが、しかし、どんなに弁えたところで、これはどうすることもできません。そして、それについて神様はすべてをご存じであるのです。

ですから、いくら取り繕ったところでどうすることもできません。ただ、だからといって、それでいいということではありません。しかも、御前にあって露わにされる私たち人間の問題は、多くの場合、私たちにあって見たくはないこと、触れたくもないこと、聞きたくも知りたくもないことです。ですから、それが露わになったとき、私たちの多くは、きっと、罪人だから仕方ないとは思えません。自分と直接関わりがないことであればまだしも、直接関わることになれば、その時の反応は敢えて言葉にするまでもないのでしょう。ですから、知恵ある正しい人は、その場を何とか収めようとするものです。そして、その一人がイエス様の父ヨセフであったと思うのです。それゆえ、今日の御言葉は、なるほどその通りだと納得することもできましょう。つまり、知恵ある正しい人とは、ヨセフのように寛容にも御心を受け入れることのできる人であり、だから、私たちもそうそうせねばならないとそう思ったりもするのでしょう。しかし、すべての者がそのように考えるわけではありませんし、できるわけでもありません。

そうあらねば、そうせねば、という強いメッセージ性は、違和感を感じない者には受け入れやすいものです。けれども、それを受け入れることのできない者には、強い違和感を与えるだけでなく、大きな躓きをも与えます。しかし、そこで器用で賢い人は、上手に躓きを避けるのでしょうか。けれども、それができない人、やりたくはないとはっきりとした意思を持っている人はどうでしょうか。その場合、躓きゆえに深い傷を負うことにもなるのでしょうか。そして、この深い傷を負ったのが、イエス様の父ヨセフであります。それゆえ、ここに記されていることは、信仰者の一つの理想像でもあるのでしょうか。しかし、ヨセフと同じことが我が身に起こることは恐らくは絶対にありませんが、神様の御心として、これだけの傷を負わされたとしたら、私たちはなお正しい振る舞いをなそうと思うのでしょうか。よしんば、天使が現れ、その経緯を詳しく説明してくれたとしても、それで、あい、分かりましたと言える人が一体どれほどいるのでしょうか。

けれども、御言葉がここで語ることはすべて正しいことでもあるのです。なぜなら、聖霊によって現されたことは全て神様の正しさを現すものでもあるからです。けれども、その正しさは、理不尽きわまりないものです。それゆえ、この理不尽きわまりないことを正しいとしなければならぬとしたら、神様は人を見ていないことになります。けれども、それを理由に御言葉が語る場所を、私たちが簡単に投げ出すことはできません。もし投げ出してしまったら、あるいは、自分を蚊帳の外に置いて、人に対してだけ、こうあらねば、こうせねばと言うだけなら、聖書の御言葉ほどつまらないものはありません。しかし、もちろんそうではない、では、そうではないならどうなのか。そこで皆さんは何を思うのでしょうか。

「夫ヨセフは正しい人であった」とあるように、躓き、深い傷を負いながらも、ヨセフはできる限り精一杯の判断を

しています。まただから、御言葉もこのヨセフのことを「正しい」と言っているわけですが、ですから、ヨセフのような思いやりの心を持つことはとても大切なことです。けれども、ここでの問題は、思いやりの心を持つ持たないということではありません。そもそもこのところでは、イエス様の父ヨセフがどうしてここで深い傷を負わねばならなかったのか、ということであり、その負った深い痛手をどのようにして受け入れることができたのか、ということです。そして、そこで、忘れてならないことは、それをしたのが一体誰なのか、ということです。それは、他でもない神様ご自身であります。そして、今日の最初のところで「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった」と御言葉が語るように、このことはつまり、この訳の分からないところに現されているものが福音であるということです。

それゆえ、この受け入れがたい出来事を私たちは福音として受け止め直さなければならぬわけですが、それは、福音には大きな力があるからです。ただし、そこで直ちにこの福音を喉から手が出るくらい欲しいと思えるのでしょうか。それは、この力に与るためには、一つのプロセスを通らなければならないからです。それが、ヨセフのように躓き、傷つくということでもあるのですが、つまりは、福音の力を私たちが知るためには、そこで大きな痛みを伴わなければならないということです。それは、福音は後出しじゃんけんのように勝った勝ったと言っていればすむものではないからです。深い傷を負い、躓くしかないものが福音であり、それがイエス様の誕生の出来事であり、イエス様の物語であるのです。ですから、すべての始まりであるそもものところでそれが語られているということは、私たちが先ず経験すべきことはこの躓き、傷を負うということです。それゆえ、何事もなく、通り一遍でこの話を終わらせることはできません。御言葉が語る場所を相当な覚悟をもって聞い

ていかねばならないわけで、しかも、私たちはこれから数年をかけてこのイエス様の物語に聞いていこうとしているわけです。ですから、なおのことそういうことであると思うのです。

ただ、その場合の覚悟とはどういうものなのでしょう。覚悟を語るという時起こることは、往々にして押し付け合いです。それゆえ、できるできないと言うところで語られる覚悟ほどつまらないものはありません。けれども、イエス様の物語に聞いていく覚悟というものはそういうものではありません。今申します覚悟とは、私たちが今居るところ、自分がどこに生きているのかということです。しかも、誰とどんなふうに、ということです。つまり、今申し上げている覚悟とは、インマヌエル、主我らと共にいます、ことへの覚悟であり、私たちが今こうしているところ、生きているところとはつまり、ここは、私たちの目から見れば、いろいろなものがその目に映り、そのため、いささか統一性に欠けているようにも思えるのですが、けれども、そこに神様がお遣わしになったのがイエス様であるということです。まただから、天のことに不慣れな私たちは、これは当たり前のことではありますが、不慣れであるがゆえに躓くしかないわけです。

ですから、ヨセフの立派な振る舞いは確かに正しいとしか言いようのないものでもありますが、けれども、神様の御心を良しとはしていないところに問題があり、それゆえ、不慣れであるがゆえの揺らぎが透けて見えてきたりもするのです。つまり、私たちが躓くしかないのは、天上の事情に私たちがただ通じていないからだけではなくて、通じていないがために、そこで私たちが直ぐに持ち出すものが問題であるということです。それは、目の前の出来事を直ぐに正しいとか間違っているとか言わずにはいられない自分自身でもありますが、従って、私たちににとっての一番の躓きは自分自身ということです。けれども、そこで大事なことは、躓いても、転んでも、いや、躓

き、転べばこそ、私たちはそこでインマヌエルの君と自分とは、今ここで一緒にいるんだということを知られるということです。それは、天上の私たちの手の届かないところにいますお方が私たちの神様なのではなく、その独り子を通して、地上に這いつくばって生きるしかない私たちと共に歩んでくださっている、それが私たちの神様であるからです。そして、御子の誕生はそのことを私たちに伝えてくれているのです。ですから、福音というと、私たちはどうしても高尚なもののように思ったりもするのですが、地に這いつくばるように働くものが福音であることを思えば、神棚に祀っておくものではありません。それゆえ、この力は、できるできないといった塩梅に、自分を誇ったり、あるいは、卑下したりするところから見えるものではありません。ここに居る、ということから見えてくるものが福音の持っている力であり、そして、それがこのインマヌエルの神様であるということです。それゆえ、この福音の力に与るためには、自分はここを動かないぞという覚悟が大事なわけです。つまり、それがイエス様の上ということでもありますが、ですから、そう考えると、イエス様が聖霊によって母マリアの胎に宿ったということも、分かりにくい話ではありません。

神の子を宿したマリアから見れば、ヨセフは完全に蚊帳の外に置かれているとも言えるのでしょう。けれども、福音が伝えることは、そのどちらか一方だけが、ということではありません。イエス様を宿した者とも、そうでない者とも、地に這いつくばるように、共に同じところに生きたのがイエス様であるからです。ですから、そういう意味で、ヨセフが蚊帳の外に置かれたからこそ、私たちが考える内と外に限定されることなく、福音の力は、共に歩むすべての者に行き渡ることが分かるのです。それゆえ、ヨセフが蚊帳の外に置かれていることはとても大切なことであり、まただから、ここでのことは、そういう意味で私たちに

分かりやすい話で終わってはならなかったわけです。分かる分からないではなく、ここでの分かりにくさは、神様がその先を見てのことであり、それゆえ、神様は、人間というものがどういうものなのかがよく分かっておられるということです。ですから、そういうなびかないところが、やはり神様が神様である所以でもあるのですが、まただから、イエス様の居るところに私たちが覚悟をもって止まれば、福音を他人事としてではなく自分事として福音の力に与ることになるのです。

このように、私たちが信じるイエス様とは、神の義と人の罪を負ってこの世に生まれた方でした。この父と母からうまれたということはそういうことでもあるからです。そして、ここに私たちは神様の救いを見るのですが、このことはつまり、私たちが信じる救いの出来事は、神様が正しいとか、人間が間違っているとか、私たちの気持ちや考えで決められるものではないということです。つまり、いずれが、というのではなく、イエス様の中でそのそれぞれが一つになっている、このどちらとも決められない中に救いがあり、その方が私たちと共にいてくださっている、そういうことです。だから、イエス様のいますところに私たちが一緒に居ることが大切なのであり、そして、そのイエス様のいますところは、天高く私たちの手の届かないところではなく、ここです。この低きところで私たちはイエス様と出会い、イエス様と共にその生涯を生きるものなのです。それゆえ、イエス様と共にあるここから離れたところで、福音のなんたるかが分かることはありません。ですから、そう考えれば、ヨセフもマリアも、そういう意味で福音のど真ん中に置かれたということです。そして、今日のところで、ここがとても大切なことだと思うのですが、福音は、私たちの人間としての問題性を決して排除したりはしていないということです。つまり、冒頭に申し上げたように、私たちの集まるところには、いろいろな

問題が見え隠れしているものです。そして、それは、私たちにとって感じのいいものではありません。それゆえ、躓くこともありますし、相手を躓かせることもあるのです。けれども、その私たちのことを神様は毎週毎週礼拝へと招いてくださっている。イエス様が共にいますここに、いらっしゃい、来なさいと仰っている。それはどうしてなのか、それは、私たちを休ませるためです。

私たちが休むということは祝うということであり、様々な労苦から離れるということです。そして、誰でもない、そのことを一番喜んでくださっているのがイエス様であるのです。ところが、私たちはイエス様の招きに応え休むのではなく、招きを断るか、よしんば、応えたとしても労苦を選んでしまう。それは、休むことがもしかしたら怠惰なことだと考えているからなのではないでしょうか。なぜなら、休息の中で私たちが労苦を選んでしまうのは、満たされたいとの思いが強いからです。そして、それは、私たちが休むことをいけないこと、悪いことと思っているからでもあるのですが、その原因は、休むべき資格がないと私たちがそう思っているからです。だから、神様はそんな私たちを休ませるために、手段を選ばずに、聖霊の働きをもって時に躓きを与えもするのです。しかし、私たちが転び、倒れたところはどこなのか。それはイエス様と共にあるところなのです。母の日、私たちは、その母が地上にあっても、天にあっても、主にあっても今もそしてこれからも、そこに共にあることをまた知らされているのです。ただ、それにも関わらず、私たちの間には常に溝があり、絶えず、壁のようなものがあります。けれども、その私たちが主にあってこうして結ばれているのです。それは、正しくとも間違っているからであり、そこに私たちが生きているからです。祈りましょう。